



国民の森林・国有林

中部森林管理局

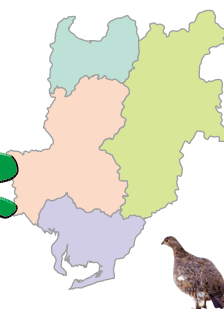
〒380-8575長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

<http://rinya.maff.go.jp/chubu/>

広報

中部の森林



カヤの平自然休養林で資材のカラマツを運搬する高校生(北信署)

貴重な自然を守ろう！ ～高校生と歩道整備～

主な項目	○ 高山植物等保護対策協議会総会	P 2
	○ 各地からのたより	P 4
	○ 寄稿「森林鉄道の源」	P 8
	○ シリーズ「森林官からの便り」	P 8
	○ シリーズ「ご当地自慢」	P 10

第五十三回 高山植物等 保護対策協議会総会

【保全課】七月十六日、中部森林管理局大会議室において「第五十三回高山植物等保護対策協議会（高植協）理事会及び総会を開催しました。「高植協」は、長野県内の国有林並びに民有林における高山植物等の保護と地域内の美化を図り、将来にわたり国民の福祉に寄与することを目的としています。

総会では、副会長の環境省長野自然環境事務局長をはじめ、長野県、警察本部、教育委員会等行政機関、山岳・観光関係団体、五地区協議会長等計二十九名が出席し、平成二十五年度事業報告及び平成二十六年度事業計画等を提案し審議しました。



総会の様子

事業報告全体では、保護指導に従事した延べ人員が「九、四九八人」で、ほぼ前年度と同数となり、保護取締件数が一、三、五九件と対前年度比九四^{パーセント}と減少したことが報告されました。

これは、各地区における指導員など関係者による継続的なパトロール活動の効果と考えています。

先駆的な取組事例として、「中信地区協議会」が、上高地で台湾、韓国等海外からの観光客が増加傾向であるため、外国人向けに山のマナーを四ヶ国語（日本語、英語、中国語、韓国語）で記載した「トレイディングカード」を作成し、グリーンサポータースタッフ等により配布を行った例が発表されました。

現場の指導員からも「トレイディングカードの要望がある。」といった声も挙げられ、今後、海外からの登山者への対応やマナーを守ってもらう取組が共通した課題となりました。

平成二十六年度事業計画では、「信州山の日」（七月第四日曜日）が制定され、「信州山の月間」が七月十五日～八月十四日までの間に設定されたことに合わせ、夏の入込者が多い期間にパトロール強化週間を設定することが、総会で承認されました。

また、行政機関の取組として、環境省長野自然環境事務所からは「国立公園における野生生物の保護管理等について」、長野県からは「長野県版レッドリスト改

訂の概要と注目される種」、中部森林管理局からは「ニホンジカの被害状況と対策」が発表されました。

豊かな森林資源の循環利用に向け

第一回愛知県木材安定供給協議会

「名古屋事務所」八月二十日、愛知県林業会館において、第一回愛知県木材安定供給協議会が開催されました。この協議会は、利用期を迎えた豊かな森林資源の循環利用に向け、需要者ニーズに対応した計画的・安定的な木材供給により、県内の林業及び木材産業の活性化並びにこれらを通じた森林の整備の促進を図ることを目的に新たに設置したものです。



協議会の様子

これまでの関係機関でこうした情報交換の場はありましたが、今回、協議会を

設置し、活動を始めることとなりました。

会長には愛知県森林組合連合会から石田敬一専務理事を選出し、事務局を愛知県森林組合連合会に置き、構成員には中部森林管理局名古屋事務所、愛知県森林管理事務所、愛知県、愛知県木材組合連合会、愛知県木材市場連盟、愛知県森林組合連合会、森林総合研究所、愛知県木材チップ協会等で構成されています。

近年の中部圏周辺の森林・林業を取り巻く木材利用の流れは、富山県・長野県・岐阜県・愛知県・三重県などにおけるバイオマス発電の動き、岐阜県・静岡県などでは大型の製材工場や合板工場で大きな動きが見られます。

今回の協議会設立により、これまで以上に情報交換できる関係を構築し、A・D材まで全ての木材の安定供給、県産材（特にあいち認証材）の普及・定着、木材の安定供給体制の構築に必要な情報の収集・提供などについて連携強化し、森林・林業・林産業の活性化や森林整備の促進となるよう取組を行っていくこととしています。

なお、協議会では、各構成員からの情報提供の他に愛知県半田市において現在建設中の国内最大級のバイオマス発電所の事業概要等について、実施主体の住友商事子会社のサミットエナジー担当者より説明を受け、その情報共有を行いました。

教職員を対象とした

森林・林業体験学習会

「木曽森林ふれあい推進センター」八月七日、木曽・上伊那地域の教職員を対象とした「森林・林業体験学習会」を、木曽森林管理署管内の赤沢自然休養林ほかで実施しました。

この学習会は、小・中学校の教職員の森林・林業についての理解を深め、森林環境教育の重要性やその知識を高めてもらうことを目的に、長野県と共催により平成十四年度から実施しているもので、今回で十三回目の開催となります。

当日は、木曽地域の教職員八名が参加されました。



赤沢自然休養林で学ぶ皆さん

午前中は、職員による案内で、赤沢自然休養林内を散策する中で、木曽地域の森林・林業の歴史や赤沢自然休養林の

生い立ち、並びに林業遺産である木曽森林鉄道の説明に耳を傾け、実際に樹齢約三五〇年にもなる木曽ヒノキやサワラなどの木曽五木を観察し、それぞれの樹種の見分け方や特徴を学びました。

午後からは、休養林近くの小川入国有林六四ほ林小班で、教職員自ら獣害（クマ）被害防止テープ巻きの作業を体験しました。



テープ巻き作業体験の様子

各人がそれぞれ防止テープ、カッターを手にして、樹齢三〇年近い人工林ヒノキのクマ被害防止テープ巻きに汗をかきました。この体験を通し、「林業と獣害の関係を知り勉強になった。」との声も聞かれました。

続いて、焼酎貯木場及び上松町にある製材工場を見学し、天然林と人工林の価格の違いや材の使い道など木材の流通や



製材工場で木材を学ぶ先生

加工の流れを学びました。

参加した先生からは「地元の森林の歴史や林業を知ることができ、大変有意義であった。学校でも森林に関する授業があるので、学んだことを他の先生や生徒に還元したい。」などの感想が多く寄せられました。

今回は、先生の方の参加でしたが、来年度は、児童・生徒も参加できるようPRを工夫し計画していきたいと考えています。

四〇〇年の歴史を熱く対談

「名古屋事務所」八月十九日、名古屋事務所へ宮木哲也熱田区長が来訪され、山元康則名古屋事務所長と対談されました。

この対談は、熱田区の更なる発展のために熱田区内に所在する行政など関係機関が定期的に参集して協議を行っている

「三水会」の場において、熱田の歴史文化の魅力を積極的に発信する取組を進めている宮木区長が、地域との連携を強め木材利用の促進や都市住民を森林・山村地域へ誘導することにより地域振興に資する取組を進めている名古屋事務所の業務に大変関心をもち、このたび対談が実現したものです。



対談の様子

この日は宮木区長のほか、園部裕美まちづくり推進室長、武内学係長も同行され、対談の後、林業の歴史と木材利用の展示コーナーを視察されました。

対談では、山元所長から中部森林管理局の概要と、日本の木材産業発祥の地とされる熱田地区四〇〇年の歴史について「堀川」開削から飛騨・木曽川における木材の流送、白鳥（貯木場）の始まりから「太夫堀」など現在では一部の面影を残すのみとなった名古屋事務所周辺の様子について説明しました。



(旧) 白鳥貯木場の歴史を説明する山元所長

宮木区長からは、「以前、名古屋市宮織部局に勤務していたとき、本丸御殿の復元にも携わったが、当時木曾ヒノキなど資材の確保に大変苦労した。」ことや、「熱田区では、熱田ブランド戦略に取り組んでおり、熱田神宮など熱田区が受け継いだ地域の歴史や文化を発見し発信することにより活力ある魅力の溢れるまちにしていきたい。」との発言がありました。

展示室の視察では、「木曾式伐木運材図会」解説コーナーを熱心に視察され、昭和三年当時の木曾川上流部から木材を流送するため、修羅、臼、堰、といった運材設備を用いた作業の記録動画も視聴されたほか、実際に動く森林鉄道や架線集材のジオラマにも大変興味を示されました。

視察の最後に記念撮影をし、名古屋事務所で作成した「熱田白鳥地区四〇〇年の歴史」パネルを山元所長から贈呈したところ宮木区長からは「周辺には白鳥庭園など名勝地があるが、この事務所には近寄り難く感じていた。地域の人たちにあまり知られていないのはもったいない。歴史を伝えることが重要、今後も連携していきたい。いただいたパネルは区



宮木熱田区長(左)へパネルを贈呈

また、当日は森林鉄道のジオラマを展示コーナーに提供していただいた中津川市在住の伊藤定夫さんがジオラマの調整のため来所されており、制作時の苦労話などについてもお話しいただきました。

木材利用のコーナーでは近年の様々な木材加工技術に驚かれるとともに「今の木材価格は？自給率は上がっていますか？」といった質問もありました。

役所で展示等活用させていただきます。」と感謝のお言葉をいただきました。山元所長からも「事務所の職員も少なくなつたが地域の皆様に情報発信してまいりたい。」と応じました。

各地からのたより

高校生による

カヤの平自然休養林の歩道整備

【北信署】八月十一日、長野県下高井郡木島平村にあるカヤの平自然休養林において、地元の下高井農林高等学校の生徒による歩道整備を北信州森林組合の協力のもと実施しました。

今回で二年目となるこの取組は、歩道整備を行いながら地元にあるカヤの平高原の豊かな自然環境について学ぶことや、国有林や森林組合を身近に感じてもらい今後の進路の参考にしてもらうと



階段作りの様子



杭打ちを行う生徒たち

計画したもので、緑地工学コースの三年生一一名が作業にあたりました。

歩道整備の内容は、丸太を使った階段作りですが、階段用の資材はカヤの平自然休養林の近隣で当署発注の間伐事業を受注している北信州森林組合が、現地のカラマツ材小径木を準備しました。

作業は、集合場所からカラマツ資材や作業道具等を約四〇分かけて現地まで担いで運搬することから始まりましたが、慣れない担ぎ上げで「もう疲れた。」との声も聞こえ、何とか現地までたどり着くことができました。

現地到着後、階段作りに取りかかり、三班に分かれた生徒達は当署職員及び森林組合職員の指導の下、資材の杭を打ち込み、打ち込んだ杭に横木を組み合わせて針金で固定し、整地するまでの一連の

作業を行いました。これまで学んできた現地実習の経験も活かし互いに協力しながら、二時間ほどの間に十二段ほどの階段ができました。

カヤの平自然休養林は、ブナ林が有名で多くの観光客が訪れます。今回の作業は「産・官・学」が連携して地域に貢献するとともに、若い世代の方々に地元自然环境や森林・林業について知ってもらう機会にもなることから、今後も継続して取り組んでいきたいと考えています。

双六池周辺の環境保全活動

【飛騨署】当署では、平成十八年度から北アルプス双六池周辺の環境保全活動を継続的に行っています。

双六池は双六岳と樺沢岳の鞍部にあり、池の周りにはハクサンイチゲ、チングルマ、ヨツバシオガマ等のお花畑が広がっていて、笠ヶ岳が遠望できます。多彩な魅力を備えた山域ですが、双六池周辺は、植生の後退や山から流れ込む雪解け水、雨水によって浸食された土砂の流入を招いています。

登山者や山小屋関係者からの強い要望によってはじめた環境保全活動は、人々による素掘の側溝と沈砂池の作設、土のうとヤシネットを使用した土留工の作設など試行錯誤を繰り返しています。高山地帯という厳しい環境にあることか

ら、強風や凍結などによって土のう、ヤシネットの劣化が著しいことや沈砂池が満砂状態となったことから二年ぶりに双六池周辺の環境保全活動を実施したものです。

環境保全活動は、九月二日～三日の二日間、当署職員七名、環境省平湯自然保護官、双六小屋関係者によって実施しました。二日早朝に出発した一行は、現地まで片道六時間の道のりを踏破して午後一時半に現地到着、登山の疲れを見せることなく、早速、作業に取りかかりました。

作業の内容は、沈砂地に堆積した土砂の土のう袋詰めと運搬、土のう袋による土留工作設（ヤシネット（二列×二十五列）で土のうを巻き込む）と流路工作設です。少人数での作業となりましたが、環境に配慮した効果的かつ効率的な工法



土留工(50m×2列)を施工

について意見を交わしながら作業を進めました。

今年の夏は天気が安定せず、飛騨地域は記録的な大雨による被害を受けました。そんな中、心配された天気でしたが、双六小屋の主人曰く「今年一番の天気」に恵まれたこともあり、作業は手際よく進められ予定した作業は全て完了しました。作業をやり遂げた職員は一緒に、その達成感と北アルプスの環境保全活動の一助を担えた満足感に浸っていました。



作業を終えた皆さん(後方は双六池)

今後も、当該エリアにおける浸食の状況や効果等を経過観察しながら、環境保全活動を進めていきます。

木曽ヒノキ備林見学

モニターツアーを開催

【東濃署】七月十八日、中津川市内に拠点を置く報道機関四社を対象に、木曽ヒノキ備林見学モニターツアーを開催しました。

この企画は、新聞記者の皆さんに、裏木曽の深山を自身の目で確かめ、さらに、この地域の木の文化を継承し歴史的な木造建築物等を支える森を育てる「裏木曽古事の森」の取組を理解し、報道に活かしてもらうために、中津川市、裏木曽古事の森育成協議会とともに東濃森林管理署が実施したものです。

当日は、青山節児中津川市長から「木曽ヒノキなどの温帯性針葉樹がまとまっている山々は世界的にも貴重です。記者の皆さんは、中津川市の宝物であるこの備林をよく知り、大いに発信してください」



御用材伐採跡地での説明